



Lillian Nayder,

The Other Dickens: A Life of Catherine Hogarth

(xiv + 359 頁, Cornell University Press, 2010 年 10 月,

本体価格 \$35.00)

ISBN: 978-0801447877

(評) 中田元子

Motoko NAKADA

本書の主張は副題「キャサリン・ホガースの生涯」にあらわれている。奇妙な表現である。キャサリン・ホガースとして人生を全うした人物はいないのだから。結婚してからの呼称は、別居後も含めて、つねにチャールズ・ディケンズ夫人であった。独身時代の名前はすべて消えてしまうのがヴィクトリア時代の女性の名前の運命だった。既婚女性は、その呼称が象徴的に示すように、存在すべてが夫の下に隠されるのである。それにもかかわらず、著者がこのような副題をつけたのは、「ディケンズ」の元に隠されてしまった時期以外も含めてキャサリンの全生涯を記述し、その全体像を描き出そうという意図があったからだろう。考えてみれば、キャサリンは、その64年の生涯のうち、三分の二にあたる42年近くは夫とは別に暮らしていたのである（未婚時代20年余り、別居時代12年、未亡人時代9年余り）。ディケンズとの関係だけでとらえられてきたキャサリンを、その限定的存在から解き放つために選ばれたのがこの副題である。

ディケンズの伝記に登場するキャサリンは、人気作家の夫に比して、あまり魅力的ではない。次々に子どもを産んではディケンズを困らせ、家政管理は妹に任せっきり、醜く肥満し、ディケンズが愛想を尽かして別居に至ったのも仕方がない、と思わされるような存在である。別居時のディケンズのやり方はちょっとひどいと思っても、だからといって、そのような仕打ちを受けたキャサリンの気持ちを思いやることもなかった。ディケンズの人生から追い出された時点でキャサリンの人生も終わりに等しかった。著者はそのようなディケンズ中心の見方に百八十度の転換を迫る。確かに、現在までキャサリンが記憶されているのは、ディケンズと結婚したからである。しかし、キャサリンには、ディケンズとの結婚前も別居後も人生があったのもまた確かである。ディケンズと結婚していた間のキャサリンのことは、ディケンズの伝記で知ることができるが、キャサリンの登場は断片的なものにならざるをえないうえ、そこに描かれているのはディケンズにとってのキャサリンである。著者はキャサリンを中

心に据え、キャサリンの人生すべてをとらえようとする。キャサリンおよび家族や友人・知人の未刊行の書簡、日記などを丹念に調べ、キャサリンの生活、ディケンズ家の状況を明らかにし、あるときは書き直す。とくに、ディケンズと出会う前の十代のキャサリンの様子や、別居後の生活などを伝える記録では、ディケンズのフィルターを通さないキャサリンが出現する。このような作業によって、著者は、従来の退屈な妻という評価を覆し、その尊厳を回復しようとする。

著者が記述するホガース家の長女としてのキャサリンは、後年の、活気のないキャサリンという印象とは異なっている。キャサリンが生まれたのは、文学・芸術活動の中心地であったエディンバラで、母方の祖父ジョージ・トムソンはその活動の中心的存在であった。父ジョージ・ホガースもアマチュアの音楽家で、はじめ事務弁護士をしていたが、キャサリンが十代のころジャーナリズムの道に転身した。父は事務弁護士時代にウォルター・スコットと知り合い、その後も交流をもった。ホガース家には、キャサリンが14歳のとき、メンデルスゾーンが数日間滞在したという。トムソン、ホガース両家とも、経済的成功を求めることより文化的な生活を優先させる家で、女性が知的・芸術的能力を育てることも奨励した。トムソン家とホガース家合同でミニコンサートが開かれる際には、キャサリンはピアノを弾き、歌を歌った。1832年にロンドンに移ってからは、妹のメアリとともに、とくにエアトン家の年頃の二人の娘たちと頻繁に行き来した。キャサリンの手紙には、姉妹の一人に対する不満も書かれており、友人ではあっても、結婚市場におけるライバルであることからくる緊張感が感じられる。一方、ホガース家の長女としては、母が40歳で出産した末の双子を、体調の良くない母に代わって面倒をみて母親のようになついていた。著者の記述からは、文化的なホガース家の娘として音楽・読書を楽しみ、年頃の娘として結婚にも大いに関心を持ち、また、一家の長女として両親から頼りにされた、活気ある未婚時代のキャサリンの姿が浮かび上がってくる。

このように生き生きと生活していたキャサリンだったが、ディケンズとの結婚によってその姿が見えなくなってしまうと著者はいう。その理由としては、まず、身体が文字通り閉じ込められることがあげられる。キャサリンは16年間に12回妊娠し、10回出産、2回流産している（とくに最初の10年間に9回妊娠、7回出産、2回流産）。著者は、これらすべての妊娠・出産について、年ごとの妊娠期間、受胎時期、出産から次の妊娠までの間隔などを示す4種類の表とグラフを作成した。これによって、キャサリンが結婚後16年間にどのような身体状況にあったかが一目瞭然となる。すなわち、1836年から1852年にかけての16年間のうち、妊娠している日が一日もなかった年は1842年の一年

だけであること、長男の出産後2ヶ月余りで次の妊娠をしていること、出産あるいは流産後、妊娠まで一年以上間があいたのは2回しかないことなどがわかる。また著者は、一般的な女性がこれだけの妊娠をするためには月に何度性交渉をしなければならなかったかも、医学的根拠に基づいて推測している。キャサリンの出産回数は、当時の平均6回という出産回数からみて多いものの、決してまれな例というわけではなかった。キャサリンの母は18年間に9回、ディケンズの母も17年間に8回出産している。キャサリンと同じ世代でも、俳優マクリーディの妻キティは10人、マーク・レモンの妻ネリーも10人産んでいる。画家フリスの妻も10人の子持ちであった。ふつう妊娠・出産は病気ではないとされる。またキャサリン自身は多産を豊かさとして肯定的に受け止めていたようだ。それでも、著者の統計表は、キャサリンの身体が頻繁に閉じ込められたことを明白に示す。

著者は、キャサリンが身体的にのみならず、精神的にも閉じ込められていったという。支配欲の強いディケンズが家事万端にも采配をふるうので、キャサリンが主体的に考え行動する場面がなくなっていったというのである。また、著者は、キャサリンがディケンズの依頼を受けて行ったことにディケンズから文句をつけられる場面を拾い上げている。ディケンズは、キャサリンあての手紙に返事を書いてしまう一方、キャサリンがディケンズに断りなく（キャサリンの知人でもある）ディケンズの知人に手紙を書いたと行ってとがめだてした。することなすことに注文がつけば意欲も萎えてくるだろう。著者は、後にディケンズが愚鈍とけなした妻は、彼自身が作り出したのだと示唆している。

著者は、キャサリンは後年の批評家・伝記作者たちによっても閉じ込められたといい、この過程が、ピルグリム版ディケンズ書簡集に収められているディケンズとの婚約時代のキャサリンの手紙の扱われ方に象徴的に示されているとみる。これはキャサリンが従姉妹のメアリ・スコット・ホガースに宛てて書いた手紙で、キャサリンが便箋一枚半書いたあと、二枚目の下半分にディケンズが追伸を書いているものである。これが、書簡集では、ディケンズの追伸の方が本文に載せられ、キャサリンの手紙本体はページ下部の注に、小さなフォントで印刷されている。ディケンズの手紙集なのだから、ディケンズが書いたものが主となるのは当然のことと考えられるかもしれない。しかし著者はこれを、キャサリンの結婚後の人生、すなわち欲望も表現も抑圧された人生を書簡集の編者が再現しているとみる。

著者はまた、批評家・伝記作者たちが無批判に事実誤認を引き継いでいることを指摘する。たとえば著者は、キャサリンが出産のたびにうつになったとされていることについて異議を唱える。キャサリンは、第一子チャーリーの出産

時、授乳がうまくいかず、付き添っていた妹メアリによれば、「今お乳をあげられないんだから将来絶対にこの子に愛してもらえない」と嘆いていた。母乳を母性愛と同一視する言説は当時支配力をもっていたので、母乳を与えないことを苦にしてうつ状態になるということはあるようなことに思われるかもしれない。しかし著者は、これは原因と結果が逆であると指摘する。つまり、産褥期のホルモンバランスの崩れと、産後4週間産室にとどまらなければならないという規範に縛られて、精神的に追い込まれてうつ状態になり、その結果授乳困難に陥ったというのである。第三子と第四子の出産後のディケンズの手紙には、キャサリンが順調に回復していることが報告されているが、このときにはディケンズの認識の改まりによってキャサリンの安静期間は短縮されており、この慣習の拘束からの脱却によって産後うつに悩まされなくなったとしている。また著者は、第九子ドーラの出産後のキャサリンの状態について、批評家・伝記作者たちが、ある一つの伝記の間違いを反復していると指摘する。それは、ドーラの出産後キャサリンがとくにひどい産後うつに陥り、そのためモルヴァーンへ水治療にでかけたとされていることについてである。著者は、モルヴァーンへ行ったのは、もともとの持病である頭痛治療のためであり、産後うつではなかったことを、すでに刊行されている書簡などによって確認する。著者の指摘をみていると、批評家・伝記作者たちは、すでに作り上げられたキャサリン像に縛られ、素直に事実をみることができなくなっているのではないかと思われる。

著者はクーツ銀行のディケンズの金銭出納台帳にも再検討を加え、キャサリンの立場を回復させる。この台帳は過去に調査されたこともあったが、ここでは、キャサリンの父ジョージ・ホガスへの支払いを、ジョージナ・ホガスへの支払いと取り違えていた。この間違った調査に基づいて、これまで批評家・伝記作者たちは、ディケンズ家の家政について、1850年代の前半から、ジョージナがキャサリンに代わって一切を取り仕切るようになったと主張してきた。しかし著者は台帳を再検討し、ジョージナには1846年から1857年までずっと、ガバナスと同等の金額しか与えられていなかったこと、この期間キャサリンにはジョージナよりずっと多い金額が与えられていたことを明らかにする。これによって、ディケンズがキャサリンとの別居を考えるようになるまでは、家政に関してジョージナには限定的な権限しかなかったことが明らかになり、ジョージナが無能なキャサリンに代わって全面的に家政を取り仕切っていたという通説が覆される。

別居後のキャサリンのことは、ディケンズ中心の記述では消えてしまう。別居をめぐっては、ディケンズのやり方を非難する声も多かったが、人気作家は

キャサリン抜きで生き続ける。一方、キャサリンの方は、別居騒動では同情を集めても、その後の人生は記録から消えてしまう。著者は、別居後のキャサリンの手紙や、つきあいのあった人々の手紙や日記、自伝、回想録などをもとに、多くの人々が継続して、また新たにキャサリンと交流をもったこと、キャサリンも人々との付き合いを楽しんだことを明らかにする。キャサリンが別居後も交際を楽しもうとしていたことは、別居後の家で12人用のマホガニーのテーブルセットやシャンパングラスを1ダース買っているところにも表れている。ジョン・リーチ主催のディナーの席でジョン・エヴァレット・ミレイの隣になったときには、画家一家を自宅に招待した。ウィリアム・パウエル・フリスの娘ジューン・パントンの自伝は、もはやディケンズが訪れることのなくなったフリス家に招かれたときのキャサリンの楽しそうな様子を伝えるとともに、一緒に観劇に行ったとき、友人と来ていたディケンズを見つけて気が動転し帰宅したキャサリンのことも伝える。キャサリンが1860年代に集めていたカルト・ド・ヴィジット（名刺版写真）のアルバムには、テニスン、クルックシャンク、ブルワー＝リットン、オーガスタス・エッグ、キャロライン・ノートン、ハリエット・ビーチャー・ストウ、ウィルキー・コリンズ、サッカー、アンデルセンなど、別居以前の知人たちのものが含まれており、キャサリンにあてて一言書き添えている人もいる。キャサリンはまた、新しい友人とのつきあいも広げていく。小説家アニー・トーマスからは、赤ん坊の洗礼式でゴッドマザーになってくれるよう頼まれる。マーク・レモンの紹介で、画家ジョージ・チェスターの妻メアリ・チェスターとも知り合いになり、1860年代から70年代にかけて親しくつきあった。ディケンズのことを「作家としては感服するが、人間としては軽蔑する」と言ったウィリアム・ハードマンは、キャサリンをしばしば自宅に招き、また妻とともにキャサリンを訪問した。著者はキャサリンと行き来した人たちの残した記録をたどり、キャサリンが別居後も多くの友人・知人と交際を続けたことを明らかにしている。

別居合意書では、別れて住むことになった子どもたちとの面会は、いつでもどこでもできるということになっていた。しかし、母を訪問して帰ると父の機嫌が悪いというようなこともあり、母子が望むだけ会えるという訳ではなかったようだ。また、ディケンズは遺言で子どもたちにジョージーナに受けた恩を常に記憶するようにと書き、暗にキャサリンとの距離を保たせようとした。しかし父の影響力がなくなったあとは母子は親しく行き来した。第七子シドニーは、両親の別居時にはまだ11歳だったので自分の意志による母との同居はかなわなかったが、父の死の前後にはついに自分の住所を母の住所に定めることができた。チャーリーがギャッツヒル・プレイスを買ったことにより、妻

としては住めなかった場所を母として祖母として訪れることも多くなり、孫たちに絵本の読み聞かせをして楽しむこともできた。ディケンズの妹、レティシア・オースティンとは1860年代親しくつきあい、彼女のために劇場のボックス席を取ってあげたりしている。さらには以前の使用人ともつながりを保っており、使用人の一人のためには職探しをし、また別の元使用人には赤ん坊のベストを送ってその健康を気遣っている。知人、親類の出産については関心が高く、しばしば産婦と赤ん坊の健康を案じている。このようにキャサリンの生活の一コマ一コマを拾うことによって、著者は失われていた別居後のキャサリンの人生をよみがえらせる。

本書はまた、キャサリンと他の女性たちとの関わりを描き、結果的にヴィクトリア時代のミドルクラス女性の多様な人生を描き出すことにもなっている。母方の叔母ヘレン・トムソンは独身を貫いた。ディケンズの弟フレッドと結婚したアナは家庭内暴力に遭い離婚する。アナの姉のクリスティアナは、産後一週間でパーティーに出席するなど慣習に縛られない生き方をした。『ハウス・ホールド・ワーズ』に寄稿していたR・H・ホーンの妻キティは、夫がオーストラリアの金鉱採掘にでかけたものの失敗に終わったことがわかると、女性ギルドに入り技術を身につける。その後、働いて経済力がつき、自立できることがわかると、夫に離婚を切り出す。キャサリンの周りの女性たちにはさまざまな生き方があった。なぜ「家庭の天使」が理想とされたか、理由が分かるようだ。

女性たちの中でもとくに三人の妹たちとの関係は、それぞれ独立した章（音楽一家出身の姉妹たちにちなんで「間奏曲」と名付けられている）を立てて扱われている。とくにヘレンは、ディケンズの伝記では、夫妻の別居時にエレン・ターナンとの噂を流したとして、その母親とともにディケンズから激しく非難された人物としてしか登場しない。しかし本書では、別居後のキャサリンと親しく行き来した人物としてクローズアップされる。ディケンズの目の敵にされ、姪、甥たちにも会わせてもらえなかったが、キャサリンにとっては強力な味方だった。ヘレンは独身時代から歌唱教師として音楽雑誌に広告を出すなどして自活していたが、別居後のキャサリンは、ヘレンが企画・出演をしたコンサートのチケットを友人に送るなど、マネージャーのように助けていた。ヘレンは結婚後はキャサリンの近くに住み、二児を出産したが（一人は幼くして死亡）、ワーキングマザーとして働き続けた。結婚後4年足らずで夫が亡くなったあとは、働きながら一人で子育てをしていく。仕事を求めて転居し、キャサリンからは離れて暮らすことになるが、年に数回は行き来した。ヘレンの娘のメイが、甥姪たちのなかでただ一人遺贈を受けたことから、ヘレンとのつながりの強さがわかる。

著者による遺言書の検討はもうひとつの異例な点を明らかにする。妹ジョージーナが、子どもたちの配偶者と同じ範疇に入れられており、ホガース家の思い出の品がひとつも遺贈されていないことである。キャサリンは、自分の味方にならなかった妹への気持ちを、最後にこのような形で表したのだ。キャサリンの遺贈の対象者には、親類縁者のほかに、親しい友人、過去現在の使用人4人までが含まれている。キャサリンは一人一人にあてて、遺贈する物とその来歴を書き記している。贈られる品々は決して高価な物ではないが、それらはキャサリンと受け手との関係によって選ばれており、その価値はその関係自体にあると著者は示唆している。

著者はキャサリンの人生全体を記述することによって、キャサリンはディケンズのみと関係をもったわけではないという当たり前のことを明確に示した。キャサリンは妻、母であるだけでなく、娘、祖母でもあり、また友人、知人、雇用主でもあった。本書では、それぞれの立場での様々なキャサリンの姿が見られ、時にはキャサリンの声を聞くこともできる。著者が描き出したのは、一人の独立した女性が、忍耐強く、人間関係を大切に、丁寧な生きた姿である。

最後に、本書に対する日本支部の貢献についてふれておきたい。謝辞の冒頭近くに、日本支部の原英一、佐々木徹、植木研介の三氏に対する感謝が捧げられている。キャサリン・ディケンズについて学生たちと話すために招いてくれ、この研究の開始段階から支援してくれた、とある。ディケンズの人生から無情にも排除されてしまったキャサリンの、初の本格的伝記が書かれるにあたって、日本支部の後押しがあったことを知り、心温まる思いがした。

書評対象図書及び評者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ関係及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。もちろん海外での出版物も対象です。取り上げるべき本がありましたらご推薦ください。また、評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれでも歓迎ですので、支部長（編集担当）または年報編集補佐までお申し出ください。少なくとも国内で出版されたディケンズおよびヴィクトリア朝関係書籍はすべて取り上げたいと考えておりますが、評者の引き受け手がなく断念した場合があります。ご協力をよろしく申し上げます。